

木更津市史編さんだより

木更津の歴史・文化・自然再発見マガジン



発行者 木更津市教育委員会 教育部文化課

〒292-8501 木更津市朝日3-10-19 木更津市役所朝日庁舎

Tel:0438-23-5309 Fax:0438-25-3991 E-mail:bunka@city.kisarazu.lg.jp

第5号

目次

- P.1. 百年前のパンデミック 「スペイン・インフルエンザ」と地域
- P.5. トピックス 木更津市内の遺跡から出土している人骨について
- P.7. 木更津市の自然 南方系昆虫の定着
- P.11. 市史編集部会の活動報告
- P.11. 千葉県指定文化財に指定された高部三〇号墳・三二号墳出土資料

百年前のパンデミック 「スペイン・インフルエンザ」と地域 近現代部会 栗原克榮

新型コロナウイルス(COVID-19)による感染症が拡大する中で、百年前のパンデミック(感染症の世界的大流行)である「スペイン・インフルエンザ」が注目されています。「スペイン・インフルエンザ」とは、一九一八年から一九二〇年に、世界各国で極めて多くの死者を出したインフルエンザによるパンデミックの俗称です。この稿では、市史編さんの調査活動の中で発見した、百年前のパンデミック禍にあった地域資料を紹介します。「スペイン・インフルエンザ」は、「スペイン風邪」「悪性感冒(かんぼう)」「世界かせ」などとも呼ばれましたが、ここでは当時の内務省衛生局が使用した、「流行性感冒」と記します。

感冒は列車に乗って 千葉県における流行性感冒の発生期を伝えているのは、「恐しい西班牙

感冒(スペインインフルエンザ)」という見出しの次の記事です。「恐しい西班牙感冒 千葉県にも猛威を振ふ 中学も女学校も芸者達も」と千葉町で感染が急速に拡大したことを伝えています。ですが、それに続いて、次のような記事が掲載されています。

木更津駅襲はる 駅員九名が罹病
木更津駅にては鈴木駅長以下駅員九名は廿一日以来流行性感冒に罹り休業静養中なるが廿五日に至り二名全快せるが尚周西駅より数名駅員の応援を得て執務し居れり
〔東京日日新聞房総版〕一九一八・大正七年一〇月二六日) 以下新聞の引用は何れも『東京日日新聞房総版』からで、「大七・十・二六」と略記する。

木更津駅は、大正元年(一九一二)八月二二日に、房総線(現在のJR内房線)の蘇我―木更津間の開通にともない開設されました。その年の十二月には県営軽便鉄道久留里線(現在のJR久留里線)も開通しました。房総線の開通により、千葉には約一時間半、東京へはおよそ三時間で行けるようになり、やがて大正八年一月には北条(館山)に至るようになりました。木更津駅は君津郡の要駅として、乗降客数は年をおつて増加し、大正七年の駅利用者は、乗車二二万四一四三人、降車二二万九五二九人、計四

四万三六七二人と一日平均にすると約千二百人が乗降していました(『千葉県統計書』大正七年第五編)。今のような自動改札ではなく、駅員と利用客が直に対面する改札であり、既に流行性感冒が「猖獗(しようけつ)を極めつゝある」千葉・東京方面からの乗降客によって、木更津の駅員がいち早く罹患したことは容易に想像されます。

「西部から東南へ 侵入した県下の世界かぜ更に蔓延す」(大七・十・三十)では、「目下各地に猖獗を極めつゝある世界感冒に就き…之が病毒の侵入伝播の状況に就き当局は語る『先づ本県東葛飾郡其他停車場所在の市街地に侵入し今や市街地より村落に侵入しつゝあり』(同)と書かれているように感冒は鉄道を伝わり県下に拡大し、この地域にも至ったと考えられます。

罹患者一〇万 新聞はこの後連日のように、県下における流行性感冒の拡大を伝えるようになっていました。

「世界かぜ益猛威を揮ふ 軍隊も学校も役所も病院も 至る所に患者を出す」(大七・十・二十九)、「世界かぜ益蔓延 何日になつたら終熄するか」(大七・十・三二)、「三万五千を数ふ県下到處(ところ)に世界かぜの患者 諸校相次いで休校す」(大七・十一・三三)、「五万余に及ばん 医師も病んで診察されず 県庁は又てん手古舞ひ」(大七・十一・六)等々。そして、「警

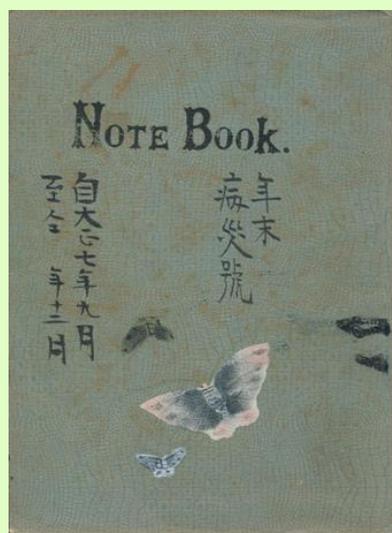
察署を襲ふた世界かぜ 罹病警官万に及ばん」(大七・十一・八)と題した記事で、初めて県下各地の感染者数が明らかにされました。「世界感冒は益猖獗を極めつゝあり七日県衛生課に報告ありたる各警察署管内の罹病者は…▲木更津署三百四名▲湊分署六百八十五名▲合計九千八百八十四名」(同)によると、十一月初旬の君津郡の罹患者は千名近くに達しています。

さらに、「世界かぜの罹患者数十万余に及ぶ」(大七・十一・二十)では、「本県に於ける流行性感冒の罹患者数は十九日県衛生課に於て発表したるが総数十五万二千六百六十一名にして内死亡者数四百十一名に達せり其の各郡別左の如し」として、君津郡の罹患者数は一万五七七一人、死亡者数二七人としています。

十一月末になると、「世界かぜやつと終熄か廿日までの調査」との見出しで、「県下に於ける悪性感冒は終熄期に近づけり廿六日県衛生課より発表されたる去る十六日より廿日までの調査によれば新患者数は三万六百五十四名死亡者二百卅三名、本年初発以来の患者数は十八万二千五百四十一名、同死亡者六百四十六名にして人口百に対する罹病者は二・〇九、死亡率は〇・三三三パーセントに当れり」とし、君津郡は新患者が一九三五人、死亡者一八と報じています(大七・十一・二八)。

感冒に襲われた商家 この年十月から流行し

始め十一月には猖獗を極めたこの流行性感冒に、家族が罹患し悲慘を極めたことが書かれた日記が残っています。桜井の雑貨商家に残されていた、明治後期から昭和の戦後期まで書き続けられた個人日記です。本人と家族が罹患した大正七(一九一八)年の日記の表紙には「年末病災號」との書き込みがされています。



日記「年末病災號」

「十一月六日、朝曇南風也正午頃南風止マル…頭痛ス、早く寝二就ク」との風邪の予兆が書かれ、翌日の「十一月七日、曇、風邪臥床ス、流行性感冒」から、流行性感冒の闘病記録が始まっています。十一月八日には本人と妻そして子供二人の「四人風邪…夜安藤医来タル」とあります。「十一月九日…四人風邪ノ處(娘は)例ノナキ下痢ナリ」「十一月十日…余本日快起床ス、(息子)快シ外出ス、(娘)下痢二困ル心痛ス」と記しています。この日は実家でも二人が罹患し、さらに雇人も罹患し自宅へ帰っています。特

に娘の症状が悪化し、「十一月十一日…(娘は)本日ハ昨日ヨリ下痢幾分遠ザカリシ様ナレド、本日ニテ四日間絶食ト発熱トせき出ヅ爲メニ衰弱シ」、煎じた漢方を「冷シサトウ混じ少量与へたが、血便があつたため「夜安藤医来タル診察ス…直ニ腸洗浄ヲナシタリ」と書いています。

さらに続けて、世界風邪去月来ヨリ京浜各地千葉木更津ニ流行セシモ昨今ハ当地盛ニ流行シ各家共患者数名づアリ宅ニテハアト(息子)ト(娘)ナリ、后而(娘)ハ余病ノ爲メ長シ」と記しています。また、十一月二四日には、「世界風邪日本中ノミナラズ名称ノ如ク世界中ナリトコノタメ余ニ病ニカゝルモノ多シ」と記しています。妻と子供の病状は回復せず、全快して床上げをしたのは年末でした。

益々猖獗の兆 新聞には「県下に於ける悪性感冒は終熄期に近づけり」(大七・十一・二八)との見出しが打たれ、十二月に入ると一旦小康状態を得たかのように見えました。しかし、年が明け、冬が本格化するとともに、流行性感冒は再び拡大します。「悪性風邪 益々猖獗の兆」との見出しの記事では、「本県に於ける悪性感冒患者数は初発以来二十八万二千八百七十二名にして内死亡者二千五百二十四名なるが本日一日より十三日迄に至る新患者及び死亡者の郡別は左の如し」として、君津郡は新患者が一二七九名、死亡は三八名と報じています(大

正八・二・十四)。

こうした報道では、「猖獗(この上もなく勢いがかんで荒れ狂うの意)」という言葉が多用されました。「感冒猖獗 五日間の調査」では、「県下悪性感冒患者は初発以前の累計廿九万九百七十五名にして再患者三千二百七十六名あり此の内死亡者二千八百六十六名を出したるが去る十五日より廿日迄五日間の最近各郡別新患者死亡者数左の如し」として、君津郡の新患者七一六名、死亡は二三名出たとしています(大八・二・二二)。

内務省衛生局編『流行性感冒』では、「各府県に於て調査したる流行期間、患者死者総数を各流行別に比較すれば左の如し」として、流行期間を三回に分類しています。その第一回は大正七年八月から八年七月までとし、この間の患者二一六万八三九八名、死者二五万七三六三名で、患者百に対する死者の割合を一・二二とまとめられています。

この内務省衛生局による調査の元は、各道府県からの調査報告です。千葉県文書館に残されている数少ない流行性感冒の文書の一つが、千葉郡教育会『大正六・七・八年郡長会議事項下』に綴られていた、「流行性感冒患者及死亡者数調査表」(自大正七年十月流行初期至大正八年五月五日)です。その調査表では、君津郡と千葉県の数値は次のようになっています。

君津郡 総人口	一四五、三二三
患者数	二七、五四九
死亡者数	三一二
人口千二付患者	一八九・五八
患者百二付死者	一・一三
県合計総人口	一六八四、六五四
患者数	三〇八、〇一六
死亡者数	三、五八八
人口千二付患者	二二〇・五六
患者百二付死者	一・一六

金田小休校の記録 インフルエンザウイルスにとって格好の標的になったのは、集団生活をする軍隊や学校でした。君津郡における学校での集団感染と休校を最初に報じたのは、「金田小学校は遂に休校 罹病者四百余名に及ぶ」(大七・十・三十)です。その間の事情を記録した『大正七年度日記 金田尋常高等小学校』が、金田小学校に残っています。

十月二十八日(月)

流行性感冒本村ヲ襲ヒ猖獗甚シク児童中該病ニ犯サルモノ多ク候テ出席児童極メテ少数出席児童中ニテモ頭痛悪寒等ノ症状ヲ呈スル

十月二十八日(月)

流行性感冒本村ヲ襲ヒ猖獗甚シク児童中該病ニ犯サルモノ多ク候テ出席児童極メテ少数出席児童中ニテモ頭痛悪寒等ノ症状ヲ呈スルモノ多ク速モ授業不可能ナレバ茲ニ麻痺学校医ト協議ノ上本日出席児童ニツキ健康診断ヲ行ヒ遂ニ臨時休業ヲ申渡スルニ至レリ

一、二十八日ノ出席在籍五三七 出席二百二

(内健康者 百二十九名 不健康者七十三名)

二、臨時休業

(一週間二十八日ヨリ十一月三日マデ)

1、学校医ノ意見

一 児童ノ疾病多キト症状ノ経過トニ

ヨリ約一週間ノ休養を要ス

二 不健康児童ノ推シテ出席スル傾向

アルハ憂フヘキコト

2、学校医ノ健康診断表

十月二十九日(火)

山口君津郡長並ニ石崎視学来校 児童ノ病

状調査ノ為ニ第一回家庭訪問ヲナス

十月三十一日(木)

天長節祝日ノ祝賀式挙行

〔教員欠勤瀾に四名の記載〕

十一月一日(金)

〔教員欠勤瀾に五名の記載〕

十一月二日(土)

児童ノ症状調査ノ為ニ第二回ノ家庭訪問ヲナス

〔教員欠勤瀾に三名の記載〕

世界かぜに呪はれた学校 また、昨年閉校し

た富岡小学校の沿革史にも、「(大正七年)十一月十二日、三日間臨時休業ス」(『自明治六年度 至昭和四十三年度沿革史富岡小学校』)との記録が残っていました。

学校関係の新聞記事を追ってみます。

「世界かぜ益蔓延 何日になったら終熄するか」の記事では、「▲君津郡 中学に廿一名、女学校に七名金田村尋高小学校は休校し巖根村小学校は卅日に至り約三百名欠席せり木更津小学校は廿九日、欠席生徒二百余名なりしが卅日に至り稍減少せり清川村(長)須賀西尋常小学校にては百九十余名ト(大七・十・三二)と報じています。また、「世界かぜに呪はれた小学校」と題した記事では、「凄じき魔の感冒小学児童の大半は罹患し 犠牲者の悲報洵りに飛来す、県下に於ける世界感冒は益猛烈を極め罹病者日に激増するのみなせず本月に入りて死者続出するに至り」として、君津郡巖根村出身の千葉師範学校生徒三年生(十二歳)が県立病院に入院していたが遂に亡くなったことを

伝えています(大七・十一・五)。

さらに休校した学校の報道は続き、「県下の世界かぜは日に日に猖獗し其後休校せる学校左の如し△君津郡 檜葉校(七日より)▲神納校(同)▲金谷校(同) (大七・十一・八)。「県教育課へ到着した 十一日までの報告」では、「県下小学校に於ける流行性感冒の状態は未だ猖獗を極めつゝあるが県教育課にては過半来より各郡に對し此れが詳細なる回答を徴せしに：其の状況は左の如し◇君津郡 休校は金田、周南、神納の三校にして罹病者合計六百二十七名に達せり十二日何も複校せり」(大七・十一・十一)。さらに、「世界感冒後聞」と見出しを打った記事では、県下小学校四百五十八校中流行性感冒の爲め閉鎖せるもの百七十九校一部閉鎖十校あり又郡立中等学校十七校中閉鎖十校を算せり其後の在學生及患者左の如し」として、君津郡では一九校が閉鎖(休校)し、在學生徒七四九一名に對し患者生徒数は三一七二名と約四割の児童生徒が罹患している状況を報告しています(大七・十二・十九)。

流行性感冒は中等学校にも拡大し、「各中等学校の欠席者数、県下中等学校に於て悪性感冒の爲めに欠席せる生徒左の如し」として、木更津中学校では 在學生四〇一名に對し、欠席が一二〇名うち罹病者は一一七名であると報じられています(大七・十一・五)。木中では、十

月下旬に京阪地方(五年)、横須賀・箱根(四年)、銚子・筑波(三年)、安房(二年)、千葉(一年)の修学旅行を実施しましたが、旅行先はいずれも流行性感冒が拡大している地域でした。そのため十一月になると流行性感冒が寮生に広がり、健康な生徒三十名は代理保証人宅から通わせるなどの対策をとっています。(『木高百年資料篇』)

また、「君津郡小櫃農学校は八十余名の生徒中該病にて欠席するもの五十名に及びたれば四日より四日間臨時休校せり」(大七・十一・七)、「世界感冒後聞」と題した記事(大七・十二・十九)では、県下中学校で閉鎖三校、高等女学校の閉鎖校三校、「郡立中等学校十七校中閉鎖十校を算せり」と報じていますが、木更津中学や木更津高女が含まれるかは不明です。

おわりに 内務省衛生局編『流行性感冒』は、「スペイン・インフルエンザ」の流行を三期に分けています。この稿で記したのは第一期の君津地域での流行の諸相です。第二期以降の流行の諸相は、また流行性感冒に対してどのような対策が執られたのか、そして地域社会の様相は等々、まだふれなければならぬ諸点が残されています。しかし、与えられた紙数が尽きたので、別稿を期したいと考えています。

トピックス

木更津市内の遺跡から出土している人骨について — 諏訪谷横穴墓群出土例を中心として —
考古部会 谷畑美帆

古くから栄えていた上総地域にも様々な遺跡があります。また、この中にはかつてこの地で生活していた人々が埋葬されている墓地も含まれていて、そこから人骨が出土することもあります。

日本の土は酸性に傾いているため、骨が腐りやすく、埋葬されていた被葬者(＝人骨)が完全な状態で出土することはほとんどありません。しかし木更津市内にある諏訪谷横穴墓群から保存状態の良い人骨が数体出土しています。

諏訪谷横穴墓群のあった場所(木更津市請西字諏訪谷一四九六番地に位置)は、現在公園などになっていて、ここに横穴墓(よこあなぼ)があったことを知る人は少ないかもしれません。しかしここにもともとあった台地の斜面上には、八基の横穴墓が造られていました。

お墓は被葬者と共に埋葬されていた土器などの副葬品から約一五〇〇年前(古墳時代)に造られたものであることはわかっています。そして、このあたりは請西遺跡群と呼ばれている古墳時代のお墓(古墳や横穴墓)が集まっている場所の一つだったのです。

横穴墓では、洞穴の様に横に穴をあけて、被



諏訪谷横穴墓群付近の現状

葬者を埋葬する空間を造って埋葬します。横穴墓の大きさは奥行き五―六m、幅二m、高さ二mほどで一人の被葬者を埋葬するには少し大きいように思われるかもしれません。

現在、市史編さんの仕事のひとつとして、諏訪谷横穴墓群に何人くらいの人が埋葬されているのかを調べています。

まだ人骨の細かな作業を実施している最中ですが、一つの横穴墓には、大体四人くらいの人たちが被葬者として埋葬されていたことがわかりつつあります。

たとえば、保存状態の良い男性人骨(二十代

後半(三十代)の場合、身長一六〇cm弱。骨に病気の痕跡はあまり確認できていませんが、歯が悪かったようで、生きているときに二本抜けてしまっています。歯茎(はぐき)も下がっていますので、この人物は生前、歯周病などの歯の病気とたたかっていたでしょう。



歯が数本抜けてしまっている。歯のすり減り(=咬耗:こうもう)も激しい。

歯の病
気は古代
の社会に
おいては
深刻なも
のです。
今の私た
ちですと
歯医者さ
んで治療
してもら
えますが、

こういったサービスを受けられなかった時代の人たちは、ずっと死ぬまで歯の痛みに耐えなければならなかったのです。

諏訪谷横穴墓群に埋葬されていたのは大人ばかりではありません。六歳くらいの子どもが埋葬されていたことも確認できています。幼くして亡くなったこの子ども骨からは、病気の痕跡をみつけることはできていませんが、骨に病気の痕跡を残す間もなく、この世を去ったと推測され



癒合歯。隣り合った歯が癒合している。

ます。また改めてここで言うまでもありませんが、人間の歯は一本ずつはえてきます。しかし、そうでは

なく隣にある歯とくっついてはえてくる歯(癒合歯(ゆうごうし))もあります。癒合歯のほとんどは乳歯ですが、ここで確認できているのは永久歯(癒合歯の出現率は永久歯では約〇・三%)でした。

このほか、骨には骨膜炎(こつまくえん)などの炎症性の所見が残されることがあります。しかし、病気の痕跡のほとんどは骨に残されません。それは骨がわたしたちの体の一〇%未満にすぎないため、骨からすべてを知ることは難しいからです。そのため、さきほど紹介させていただいた子どものように死因を明らかにできないことが多いのです。感染症にかかって骨に病気の痕跡を残すことなく亡くなることは多々あったでしょう。



骨膜炎の所見が観察される下肢(かし)骨

いま、新型コロナウイルスによつて社会が大きく変わろうとしています。感染症は私たちにとつていつの時代も恐ろしいものです。しかし、私たちはこうした敵とこれま

つてきました。一五〇〇年前の人たちもいろいろな病に悩まされながら生きていたことでしょう。諏訪谷横穴墓群に埋葬されていた人たちはどのような人たちだったのでしょうか。親子など血縁関係にあつた人たちなのかもしれません。親族関係については、国立科学博物館や国立歴史民俗博物館の協力を得てDNA分析もお願いしていますので、その調査結果を皆さんにお知らせできる日も近いでしょう。

いづれにしてもこうしたお墓をつくることのできた人たちは、当時の社会におけるこのあたり有力者と考えられます。

諏訪谷横穴墓群は、古墳時代以降もお墓として使われることがあつたようです。そのため中

世の古銭(十二〜十四世紀)と共に埋葬されている被葬者も確認されています。

木更津市内ではこの他、古墳時代以降に相当する火葬された人骨なども出土しており、今後木更津市が刊行する発掘調査報告書にその一部が掲載される予定です。今後の研究進展をこ期待ください。

参考文献

眞嗣史「請西古墳群」『千葉県の歴史』資料編 考古2(弥生・古墳)(二〇〇三)p五七八―五八一(財)千葉県史料研究財団

實川理『請西遺跡群1』(一九九一)(財)君津郡市文化財センター

谷畑美帆『鈴鳴りのかなたで』(二〇二二年出版予定)

木更津市の自然 南方系昆虫の定着

自然部会 成田篤彦

近年、南方系チョウのナガサキアゲハ、ムラサキツバメ、テングチョウ、ツマグロヒョウモン、アカボシゴマダラ、クロコノマチョウなどが市内に新しく定着しました(相澤二〇一九)。それ以外に、クマゼミ、ミナミアオカメムシ、ヨコヅナサシガメなどの南方系昆虫が棲みついています。ここではナガサキアゲハ、ムラサキツバメ、アカボシゴマダラ、クマゼミ、ミナミアオカメムシについて市内侵入の経過や生息状況などを述べます。木更津市立図



写真1 ナガサキアゲハのメス 後翅に突起がない。ツツジの花の蜜を吸う。2009.5.9 伊豆島

書館には文献調査で、伊藤文子氏には幼虫同定で、相澤敬吾氏には査読でお世話いただきました。深く感謝します。

ナガサキアゲハ 本種は房総ではモンキアゲハと並ぶ最大級アゲハ類で後翅(うしろばね)に尾状突起がない特徴があります。幼虫はミカンなどの柑橘類を食べます。若い幼虫は緑色を帯び、鳥の白い糞に似ています。成長した幼虫は体長約七センチメートルになり、さなぎで越冬します。本種は一九四〇年代には九州と四国まで分布していましたが、一九八〇年代に近畿地方、二〇〇〇年代に南関東各地で見つかるようになり(倉西二〇〇八)。

南方系のナガサキアゲハが北の地域に棲みつくにはさなぎが冬の寒さに耐えねばなりません。大阪の研究で、ナガサキアゲハの越冬さなぎが

半数生存する気象条件は冬季の最低気温がマイナス三・四℃以上、冬日(0℃度を下回る日)が五二日以下と推定されました。大阪市北部の低地では一九五〇年代における冬季の最低気温の平均はマイナス五・四℃。冬日の平均日数五四日でした。しかし、ナガサキアゲハが定着した一九九〇年代は、冬季の最低気温の平均はマイナス三・三℃、冬日の平均日数は二六日でした。また、元々分布していた奄美大島産のさなぎが、野外実験で近畿地方でも越冬したことなどから、休眠や耐寒性の生理的な性質の変化をとまわずに北へ分布を広げてきたと推測されました。以上のことから、本種が近畿地方で越冬できるようになったのは、休眠性や耐寒性の強化ではなく、冬季の気候温暖化によるものと結論されています(倉西二〇〇八、吉尾・石井二〇一〇)。

本種のさなぎの耐寒性の生理的性質が房総に北上してきても変化がないと仮定して、木更津市の一九八〇年代の最低気温の平均は約マイナス五・五℃、冬日は三九日で、この年代に木更



写真2 ナガサキアゲハの幼虫 2006.10.20 中尾



写真3 ナガサキアゲハの越冬サナギ 2006.10.19 中尾



写真4 ムラサキツバメのメス 後翅に突起。上がオス。成虫越冬
2006.1.15 中尾

津市に侵入したとしても冬を越せない気象条件です。一九九〇年代では平均最低気温はマイナス三・七℃、冬日は約二六日で、この条件では山に囲まれた陽だまりなど、場所によっては越冬できる可能性があります。二〇〇〇年代に入ると最低気温の平均がマイナス二・五℃、冬日は一九九日で、越冬できる気象条件になっています。

県内では一九七五年に船橋市で一例、二〇〇〇年に館山市、二〇〇一年に南房総市、君津市、富津市、二〇〇四年に木更津市で確認され、二〇〇六年に市内で幼虫、越冬さなぎも確認されました。木更津市の温暖(暖冬)化の状況と本種が市内に定着した年代がほぼ一致します。以前から、夏ミカンなどの柑橘類が栽培されていたのが侵入、定着に役立ち、庭木への栽培拡大も後押しして、今では、市街地、農耕地、社寺林など、市内で広範囲に生息しています。

さて、房総での発生のいきさつですが、東海地方では一九九八〜二〇〇〇年に単発発生記録はありますが、増加・分布拡大が房総より遅れていたため、関東地方の生息を自然分布とするにはかなりの無理があります。温暖化に支えられた、飼育個体の逸出、放チョウ、輸送機関で運ばれたなどの国内帰化の可能性が高い(高桑二〇〇一)。しかし、昔からいたとの説(福島一九八四)もあり、そのいきさつは不明です。

ムラサキツバメ ムラサキツバメは体長約四〇ミリメートルのシジミチョウ類で、ムラサキシジミと酷似していますが、後翅に突起があります。

一九七二年以前の北限は三重、京都、和歌山県でした。房総では、一九八三年六月に館山市藤原の南房総パラダイス内でオス二頭が採集されたのが最初でした。ついで、一九九九年に鴨川市と袖ヶ浦市で、二〇〇一年にはほぼ県下全域に分布していました(佐藤・井上二〇〇三)。このことから本種は房総半島南部から侵入し、世代を繰り返して北へ分布を広げていったと考えられています。木更津市では二〇〇四年草敷、二〇〇六年中尾などで確認され、現在、食樹のマテバシイがある、農耕地や住宅地の公園、社寺林など市全域に生息しています。ちなみに、房総の分布拡大の要因の一つにマテバシイが、侵入前から、広く植栽されていたことが考えられます。

アカボシゴマダラ 人為的な放チョウの結果、大陸中国産と考えられるアカボシゴマダラ(名義タイプ亜種)が、関東地方で自然繁殖しています。侵入年代は一九九五年(埼玉県、一過性)、一九九八年(神奈川県、繁殖・定着)。二〇一〇年以降は関東全域に分布を拡大しました。幼



写真8 ムラサキツバメの食樹、マテバシイの垣根
2006.9.4 清川



写真9 アカボシゴマダラ幼虫
2017.10.12 矢那



写真6 ムラサキツバメ幼虫と蜜を求めて群がるアリ
2007.9.9 清川



写真7 ムラサキツバメ集団越冬
2006.12.17 中尾



写真5 アカボシゴマダラ 後翅の赤紋が完全な環状でなく、馬蹄形。中国大陸原産の外来種。エノキに産卵、幼虫越冬。
2014.9.12 長須賀



写真 10 クマゼミのオス
本州最大のセミ。サク
ラの樹で鳴く。
2008.8.10 清川

虫はエノキを食べます。幼虫期にエノキを利用する在来チョウが侵入によって影響を受け、東京都でこのチョウと在来種のゴマダラチョウが競合し、後者が激減したとのデータもあります(松井二〇一〇)。県内では、二〇一〇〜二〇一四年に野田市などいくつかの北総の記録、館山市、君津市、富津市などの記録が続出しました。筆者の調べでは、県内で最も早い侵入は二〇〇八年富津岬です。このチョウの神奈川県初記録地は一九九八年藤沢市辻堂(月刊むし編集部二〇一〇)で、富津岬とは海を隔て、直線距離で約三三キロメートルの位置。そこから三浦半島と一〇キロメートルの東京湾を横断し、約十年後に富津岬へ侵入し、房総に分布を拡大したのかもかもしれません。しかし、陸路からの侵入も否定できません。また、本種は千葉県の外来生物リスト(影響度・緊急度Cランク)に掲載されています(千葉県希少生物及び外来生物に係るリスト作成委員会二〇一二)。

クマゼミ

クマゼミは暖地性のセミでオスが七月中旬〜八月中旬の午前中に主に鳴きます。旧安房郡鋸南町保田で一九五〇、一九五一年に鳴き声、一九七三〜一九九七年に富津市西川などで二〇の鳴き声記録があります(川名興一九七八)。一九七五年に千葉県立木更津高校の生徒約四百名にクマゼミの鳴き声と標本を提示し、アンケートを実施しました。その結果、一九六六〜一九七五年の十年間で市原市〜鋸南町まで二八のクマゼミの採集と鳴き声の回答がありました。市原市や木更津市から通学する生徒が過半数を超える中で、富津岬周辺で多くの記録があり、毎年聞くとの回答もありましたが、大部分は単発発生記録でした(立花一九七五)。当時、太平洋側の分布の東北限は神奈川県で平塚市西部と城ヶ島を結んだ線と考えられていました(中尾一九九〇)。

『図説木更津のあゆみ』自然編の調査記録を集約した結果、木更津市内でも二〇〇五年以降、毎年、複数個体が海岸沿いの埋立地や平野、台地上の公園、学校などのサクラ並木で鳴いていました。しかし、旧馬来田地区など内陸部では鳴き声がほとんど聞かれないので、海岸沿いの温暖な地域に主に発生していると思われる。

次に、温暖化とクマゼミ分布の関係を述べます。関西の例では発生可能な地域の温度条件は八月の平均気温が二五・一℃以上。一月の平均

気温が三・〇℃以上です(沼田・初宿二〇〇七)。木更津市の一九七八〜二〇一九年の一月と八月の平均気温で、この温度条件を



写真 11 クマゼミの抜神
11(左)2011.8.10
産(右)木更
津市産
津市産
津市産

満たさない年が、一九八〇年代と一九九〇年代に四回あります。発生可能な温度条件が関西と変化していないと仮定すると、ほぼ、一九七〇年代から、クマゼミがすすめる温暖な気候に達していたと言えそうです(気象庁各種データ資料木更津市詳細気温月ごと)。環境庁の一九九五年のクマゼミの調査では、千葉県では房総丘陵地を除いて平野や台地全域が、クマゼミの生息できる温度条件に達しているが、また、たどりついていない地域が多いとされました(沼田・初宿二〇〇七)。木更津市や富津市の平地などでは一九七〇年代には棲みつける温度条件が整い、そこに、西日本からの植木と共に少数の幼虫が運ばれ、富津岬などの海岸沿いの平地に定着し、徐々に分散を続け、市内の温暖な海沿いの地域に少しずつ数を増やしてきたと推測しています。なお、二〇〇〇年代には野田市、柏市、千葉市で鳴き声が聞かれるようになっていきます(倉西二〇〇八)。

ミナミアオカメムシ 体長一〇ミリメートル。



写真 12 ミナミアオカメ
ムシ セイタカアワダチ
ソウの葉上にいた。
2013.11.3 祇園

南方系
の農業
害虫で、
九州地
方を中
心に発

生していましたが、近年北方への分布拡大が進んでいます。本種は、成虫越冬で極めて食性が広く、イネの斑点米（出穂期以降にカメムシ類の成虫または幼虫が吸汁したあとが残ったもの）の原因となる他、ダイズや多くの野菜類を食害します。千葉県では平成二二（二〇〇九）年に勝浦市で発生が初めて確認され、それ以降、南房総地域で継続確認されています。成虫は一月の平均気温が5℃を下回る地域では越冬可能性が低下しますが、県内では南部や沿岸部を中心に越冬可能な地域が連続的に存在します。平成二六（二〇一四）年に木更津市の海岸沿いで発生しています（千葉県農林総合研究センター二〇一七）。今回の調査では小櫃堰付近のセイタカアワダチソウ群落で確認されました（市史研究4号投稿予定）。ちなみに、木更津市のこの十年間の一月の日平均気温は約5・8℃です。

おわりに 温暖（暖冬）化が原因で多くの南方系昆虫が市内に定着したと推定されています。しかし、原因が温暖化と結論づけるには北上した昆虫の休眠性や耐寒性などの生理的変

化がともなっていないことを確認しなければなりません。また、植物の移植、食樹・食草の栽培拡大、放チョウ、輸送機関による移動など人為の影響が複雑に関わっていることが推測され、原因究明は難しい。今後も市民の協力を得つつ、市内の自然を丁寧に記録し、市民の関心の深い南方系昆虫侵入の経過と原因を探る一助にしたいと思います。

主な引用・参考文献

- 相澤敬吾 「木更津市のチョウ」 『木更津市史研究』第二号（二〇一九）一三二―一四頁
- 独立行政法人国立環境研究所の侵入データベース アカボシゴマダラ（二〇二〇年七月三〇日）
- a 福島努 「千葉県館山市でムラサキツバメを採集」 『月刊むし』一六六（一九八四）：四五頁
- b 福島努 「千葉県館山市でムラサキツバメを採集」 『冬虫夏草』二二（一九八四）：八頁
- 平井良明 「南方系のチョウ二題」 『冬虫夏草』四〇（二〇〇一）：四五頁
- 月刊むし編集部 「関東地方におけるアカボシゴマダラの分布状況」 『同刊』四七五（二〇一〇）：一五頁
- 気象庁のホームページ各種データ・資料木更津過去の気象データ検索（二〇一六年五月一日）
- 川名興 「クマゼミ（鳴き声）の記録」 『冬虫夏草』一三（一九七八）：二頁

倉西良一 「千葉県内で分布を拡大する亜熱帯の昆虫」：岩槻邦男・堂本暁子 『温暖化と生物多様性』（二〇〇八）築地書館七八―九二頁

松井安俊 「ゴマダラチョウへの脅威放蝶アカボシゴマダラ問題を憂慮する」 『月刊むし』四七五（二〇一〇）：一七―二一頁

丸 諭 「千葉県におけるナガサキアゲハの記録」 『月刊むし』三七〇（二〇〇一）：八頁

- 中尾舜一 『ミミの自然誌』（一九九〇）中公新書
- 成田篤彦 「房総の草木虫魚一九二二号アカボシゴマダラ」 『千葉日報』二〇一四年十月十九日
- 沼田英治・初宿成彦 『都会にすむセミたち』（二〇〇七）海游舎
- 佐藤隆士・井上大成 「千葉県内におけるムラサキツバメの生息状況に関する調査2」 『房総の昆虫』二九（二〇〇三）：二一―二六頁
- 白木隆 『学研日本産チョウ類標準図鑑』（二〇〇六）三四―三五頁 学習研究社
- 高桑正敏 「亜熱帯性チョウ類2種の関東における発生の謎(1)」 『月刊むし』三六四（二〇〇一）：一八―二五頁
- 高桑正敏 「日本の昆虫における外来種問題1」 『月刊むし』四九七（二〇一三）：三六―四〇頁
- 立花康寿 「クマゼミの研究」 『千葉県立木更津高等学校生物部機関紙年輪』一三（一九七五）：二九―三六頁
- 千葉県農林総合研究センター 「千葉県にお

るミナミアオカメムシの発生実態と分布拡大」(二〇一七)「試験研究成果普及情報 病虫害部門 対象普及」(二〇二〇年七月二十九日)

千葉県希少生物及び外来生物に係るリスト作成委員会『千葉県の外来生物』(二〇一三)千葉県環境生活部自然保護課生物多様性センター

吉尾政信・石井実 「ナガサキアゲハの北上を生物季節学的に考察する」『日本生態学誌』五一(二〇〇一)：一二五-一三〇頁

吉尾政信・石井実 「気候温暖化とナガサキアゲハの分布拡大」所収：桐谷圭治・湯川淳一 『地球温暖化と昆虫』(二〇一〇)全国農村教育協会 五四-七一頁

※訂正：『木更津市史編さんだより』第四号(二〇一九)七頁本文二段目八行目 「常緑樹」を「落葉樹」に訂正(ホームページは訂正済み)

市史編集部会の活動報告

新型コロナウイルス感染症の影響で、昨年度末から今年度の六月中旬までの期間、聞き取り調査や、図書館、博物館等での調査を取りやめていました。

現在は、感染症拡大防止対策を講じながら資料の収集・調査を再開していますが、対面式の聞き取り調査については実施できない状況です。

市史編さんは、ふるさと木更津の貴重な歴史・文化・自然を次世代に受け継ぐために行っています。地域で受け継がれている風習や伝統行事、あるいは戦争の記憶。その他、皆さんの手元に残る古文書や古い町並みの写真、農具、民具などありましたら、情報提供のご協力をお願いします。

千葉県指定文化財に指定された高部三〇号墳・三二二号墳出土資料―東国最古級の前方後方墳―

請西千束台地区には、六〇基以上の古墳が造られた高部古墳群がありました。その中の第三〇号墳・三二二号墳は、三世紀後半に築造されたと推定される関東地方最古級の前方後方墳です。古墳の大きさは、三〇号墳は全長三三・八メートル、三二二号墳は三一・二メートルあります(現在、古墳はありません)。

平成五年度(一九九三)の発掘調査で、二つの古墳から中国製の青銅製鏡や、剣、槍、斧、釣



高部30・32号墳出土品

針などの鉄製品の他に、儀式に用いられた壺形土器、高坏形土器、手焙形てあぶりがた土器など、古墳出現期の典型的な特徴を示す資料が出土しました。また、出土品から三二二号墳、三〇号墳の順に造られたことがわかりました。



二神二獣鏡

このうち、三〇号墳から出土した鏡は、二神二獣鏡(にしん鏡)にしゅうきよう(しゅうきよう)で、千葉県内の出土品では最古のもので、鏡の背面には、「東王父」と「西王母」の二人の神像と、「青龍」と「白虎」の



神像のアップ 神像の右側に白虎、左側に青龍が描かれています。

二匹の神獣や銘文などが表されています。銘文は、「□□□□□□竟 好潔無疆 服者賢奉敬良子孫番昌」と判読できます。

また、出土した土器は伊勢湾岸などの東海地方からの影響が認められます。

第三〇号墳・三二二号墳の出土品は、古墳出現期における房総半島への西日本からの影響を示す貴重な資料として、令和二年三月一〇日に千葉県指定文化財に指定されました。

出土品は郷土博物館のすず(現在、休館中。令和三年度リニューアル予定)で保管中です。

(事務局)

お知らせ

刊行物のご案内

木更津市史編さんに関する刊行物を文化課で販売しております。販売の方法は、新型コロナウイルス感染症予防対策として郵便にて発送しています。詳しくは、市のホームページをご覧ください。ただ、文化課まで電話、ファックス、またはメールでお問い合わせください。

◎新刊本

『木更津市史研究』第三号(A四版 本文六八ページ) 五〇〇円 内容 「中世における木更津と本牧の交流(下)」「盛本昌広」「江戸時代における木更津市の教育環境(下)」「川崎史彦」「木更津市のバツタ目」「成田篤彦」木更津市のサクラ・見分け方と生育地(木暮文雄)

『木更津市史編さん事業公開講座記録集』平成三十年度版(A四版 本文一五ページ)五〇〇円 内容 「戊辰戦争一五〇年 脱藩大名・林忠崇の戊辰戦争」(實形裕介)

◎既刊本

『市制施行七〇周年記念 図説木更津のあゆみ』(A四版 本文二七四ページ)二〇〇〇円 内容 木更津の歴史・文化・自然を写真や図版を多く使ってわかりやすく解説しています。

『木更津市史研究』創刊号(A四版 本文一〇二ページ)五〇〇円 内容 「勤王の歌人・齋藤昌歴と安政の大獄」(實形裕介) 「木更津市域への空襲の実相に迫る」(栗原克榮) 「木更津の獅子まきについて」(田村勇) 「震災後の希望の学舎」(渡邊義孝) 「関東大震災復興から見た金田小学校校舎」(高木澄子) 「木更津市の陸生爬虫類」(成田篤彦) 「東京湾小櫃川河口干潟のシオマネキについて」(相澤敬吾) 「木更津市の魚類 ハゼ亜目」(田村満)

『木更津市史研究』第二号(A四版 本文一〇八ページ)五〇〇円 内容 「中世における木更津と本牧の交流(上)」「盛本昌広」「江戸時代における木更津市の教育環境(上)」「川崎史彦」「日露戦争後の地域社会」(池田順) 「木更津県における育児救済政策資料からの一考察」(駒早苗) 「浸透実見池の水質の特徴とカワウコロニーがその水質に与えた影響について」(湯谷賢太郎) 「木更津市の蝶」(相澤敬吾) 「木更津市の汽水・海水魚」(田村満) 木更津市の両生類(成田篤彦)

『木更津市史編さん事業公開講座記録集』平成二十六年～二十八年年度版(A四版 本文九〇ページ)五〇〇円 内容 「盤洲干潟のいきものたち」「中世～戦国時代江戸湾をめぐる武田氏 戦国時代の木更津と真里谷 武田氏」「市史を編さんすること」(こんなに身近

に宝があった！ 木更津の古民家・近代建築をたずねて」
『木更津市史編さん事業公開講座記録集』平成二十九年年度版(A四版 本文三二二ページ)五〇〇円 内容 「暮らしから見つける木更津の文化資源」

編集後記

このたび、『木更津市史編さんだより』第五号を発行します。

令和二年は、新型コロナウイルス感染症が世界的に猛威をふるい、本年十月下旬での感染者数は、全世界で四二五一人、死者数は一四万人を超え(WHO公式情報による)、未だに世界的流行パンデミックな状況が続いています。

歴史を紐解けば、大正七(一九一八)年から九(一九二〇)年にかけて大流行した人類史上最悪の感染症の一つとされる「スペイン・インフルエンザ(スペイン風邪)」では、日本国内だけでも罹患者数は二三八〇万人超、死者数は三八万人超と記録に残っています。

こうしたコロナ禍の中で、市史編さんに係る活動も大きく制限されていますが、私たちが出来ることを一つ一つ考え、市史編さんを進めていきたいと思えます。なお、市史編さんだよりは、市のホームページでもご覧いただけますので、活用ください。(事務局)